

団塊のカタログ

第4号

平成8年12月

死語の一つに三種の神器を仲間入りさせることにご異議はありませんか。

元々は皇位の印を意味する草薙剣くさなぎのつるぎと八咫鏡やたのかがみと八咫勾玉やさかのまがたまのことだが、かつて何回か我々シモジモの世界にも登場したことがある。

昭和30年代の電気洗濯機・電気冷蔵庫・電気テレビ、40年代のカー・クーラー・カラーテレビなどが代表選手だったが、いつの間に

かどこの家庭にも当たり前のように転がっていたりして、かつての庶民の憧れの的だった面影はまるでない。

といっても、今の二十代以下の皆さんにはピンとこないだろうが、ついでにもう一つ、三人娘（これも死語）というのもあった。

「団塊のカタログ」の今号はその初代三人娘の大看板**美空ひばり**特集である。

その3

第2章

0才の頃

昭和23年

その**ひばり**ちゃんがデビューしたのが、何をかくそう、この昭和23年なのである。

時計の針をちょっと戻して、終戦直後の昭和21年、**ひばり**は**美空和枝**（本名加藤和枝。昭和12年5月29日生れだから9才の時）の芸名でローカル・デビューし、それから2年たったこの年、当時メジャーの日本劇場（日劇のこと。今の有楽町マリオン）などにも出演するようになり、これをきっかけに**美空ひばり**に改名、以後はスター街道をまっしぐらに進んで行く。

始めの内はブギの女王笠置シズ子のマネなんかでお茶をにごかしていたのだが、翌24年にはコロムビアから「河童ブギ」で待望のレコード・デビューを果たし、2作目の「悲しき口笛」（♫丘のホテルの赤い灯も 胸のあかりも消えるころ…）。映画化され、出演もし

た）が50万枚の大ヒットとなり、イッキに全国区の人気者になる。

以降、25年「東京キッド」（♫歌も楽しや東京キッド いきでおしゃれでほがらかで）

26年「越後獅子の歌」（♫笛にうかれて逆立ちすれば 山が見えますふるさとの…）「ひばりの花売り娘」（♫花を召しませランラン 愛の紅ばら恋の花…）「私は街の子」（♫私は街の子ちまた 街に灯りがともる頃…）27年「リンゴ追分」（♫リンゴの花びらが 風に散ったよな）とおなじみのヒット曲が続く。

またそのほとんどが映画化され、歌だけでなく映画にも活躍の場を広げるようになるのだが、ここらあたりはまだ天才少女歌手のイメージで売り出していた頃で、歌はともかく映画は幼稚園時代のワシの記憶にはほとんど残っていない。



で、ワシが小学校に上がった29年には**雲村いづみ・江利チエミ**と組んで三人娘が結成され、翌30年には「ジャンケン娘」（東宝）が封切られたりして、ワシらの記憶はここらあたりからである。

三人娘とはいうものの、中心はあくまでも**美空ひばり**で、**いづみ**にしても**チエミ**にしてもしょせんは発展途上芸能人、すでに国民的アイドルになっていた**ひばり**の人気に便乗したにすぎなかった。

この二人だけではない。

中村錦之助（昭和48年**萬屋錦之助**に改名。もう20年以上にもなるが、この芸名はいまだになじめない）は「**ひよどり草紙**」（29年。

松竹）で、**大川橋蔵**（59年死去）は「**笛吹若武者**」

（30年。東映）でそれぞれデビュー作を**ひばり**センサーと共演させていただき、ドサクサにまぎれて売り出されているのだから、その人気の程がわかるとういうものである。

そんな**ひばり**ちゃんであったが、好事魔多し、そうそう良いことばかりも続かず、その後、試練と挫折に襲われることになる。

最初は昭和32年、下町の**娯楽の殿堂**（これも死語）**浅草国際劇場**（昭和60年、浅草ビューホテルにリサイクル）で公演中に、ファンの少女に塩酸をかけられてしまい、顔に大ヤケドをした事件である。

直後の処置と形成手術が良かったせいか大した傷アトも残らず、これは世間の同情を追い風にすぐ復活する。

閑話休題。

ワシの母校湯島小学校から歩いて1分のところに**湯島天満宮**（天神）があるのだが、3つの坂（というよりは石段）に囲まれていてその内の一つの男坂（他の二つは女坂と切通坂）を下りきったすぐ右手に**帆台荘**という旅館が当時はあって、ここが**ひばり**ちゃんの東京での定宿であり、それがまたその頃同級生だった**武本雅樹**という奴の実家だったのだ。

今は**湯島永谷マンション**なる12階建ての高級マンションに変身しているが、この事件の時にもしばらく滞在していたようで、ワシら良いコもこの芸能ネタで連日大騒ぎであったことはいうまでもない。



次の事件は5年後の37年11月に起こった。

当時日活の大スターだった**小林旭**とよせば良いのにアセッて結婚、おおかたの世間の期待を裏切ることなく、39年6月に**田岡一雄**（ある時は神戸芸能社社長、してある時はご存じ山口組三代目）の仲介でキッチリ離婚してくれた。

3番目の悲劇は身内がらみである。

ひばり自身、かの**田岡一雄**サンとの交際があったのも事実だが、弟のかとう哲也（小野透）がその関連の組の若衆頭だったことがバラされ、あわせてとばく容疑で度々逮捕されたことから世間の批判をモロにあび、急激に人気を落としてしまう。

それが原因で公演を断る地方自治体が増え48年以降しばらくNHKの紅白歌合戦からホ

サれてしまい、一時表舞台から姿を消しかかったのだが、かのNHKとケンカしたことが後に「権力に屈しない一匹狼」と評価されるようになるのだから、世の中わからないものである。

昭和52年、「歌のグランドショー」に出演してNHKと和解成立、54年には因縁の紅白歌合戦に特別ゲスト出演、ここで3曲たっぷり堂々と歌い、表舞台に復活し、とりあえずはメデタシ・メデタシ。

第4の悲劇は、さんざん悩まされたその家族との死別である。

父親（加藤増吉）は早くに（38年2月）亡くなっていたのだが、もともと存在感のない影の薄いオッサンだったので大したダメージにはならなかったのだが、問題はそのカーちゃんの方

で、この一卵性母娘ともいわれた母親（加藤喜美枝。元祖ステージ・ママ。このオババに比べれば、りえママなど台風にかます屁のようなもの）を昭和56年7月に亡くしたのを皮切りに、二人の不肖の弟（かとう哲也・香山武彦）にも相次いで先立たれてしまう。

この時はさすがに世間も同情したが、それはともかく、これまでの4つの悲劇、いずれもひばり本人の責任ではないところに注目してもらいたい。

塩酸をかけられたのは完全に被害者としての立場だったし、離婚は個人的な問題だからマスコミも含めて他人にガタガタ言われる筋合いはない。

暴力団との付き合いだって、なにもひばりだけではない。

演歌関係の地方興行にヤクザ屋さんはつきものだし、政治家や企業はもっと親密に付き合っているのに、世間の目はなぜか芸能人だけに厳しい。



そんな数々の試練にもめげなかった美空ひばりであったが、家族との離別の寂しさにはどうしても耐えきれなかったようで、41年のヒット曲「悲しい酒」（名曲！ ♪ひとり酒場で飲む酒は 別れ涙の味がする 吞んで棄てたい面影が 吞めばグラスにまた浮かぶ）を地でいってしまうのだから皮肉である。

第5の悲劇は彼女自身にふりかかってしまう。

大腸骨骨頭壊死とかいう病名からしてチョー恐ろしい

病に倒れ、さすがのひばりもこれまでかと思われたのだが、壮絶な闘病の末、昭和63年4月東京ドームで華やかに復活する。

「みだれ髪」「愛燦々」「川の流れるように」などの名曲で新たなファン層も開拓するのだが、その後再び入院、酒の呑み過ぎからくる慢性的な肝臓障害に無理な減量がトドメをさす結果になり、平成元年6月24日美空ひばりはついに帰らぬ人となってしまった。

戦後の大衆芸能史に欠かせない不世出の天才少女歌手の末期としてはあまりにも惨めであったが、昭和が終り、平成に改元されたのを待つかのごとく息を引き取ったのは印象的であった。

男女・ジャンル・新旧を問わず、わが国の歌手、いや芸能人は2種類に分けられる。

1つは**美空ひばり**、もう1つは**ひばり**以外である。

この超のつく大歌手の前では渋谷センセーなんざただのカラオケ・ババァ、三波春夫や村田英雄は健康センターの芸人、北島三郎は

流しのアンちゃん、五木ひろしとか森進一あたりなら鼻たれ小便小僧、ユーミンは新宿か渋谷あたりでウロウロしているコギャルがいいところだ。

すでに最後の悲劇の幕はおりてしまっているが、**ひばり**は不死鳥であり続けるだろう。合掌。

世の中あれこれ

気分は昭和23年

この年ウケた映画

- ★美女と野獣 (監督J・コクトー)^{ジャン}
- ★我等の生涯の最良の年 (監督W・ワイラー)^{ウィリアム}
- ★失われた週末 (監督B・ワイルダー)^{ビル}
- ★酔いどれ天使 (監督黒沢 明)
- ★王 将 (主演坂東妻三郎)

この年ウケた文学

- ★新書太閤記・親鸞 (吉川英治)^{しんらん}
- ★人間失格・グッド・バイ (太宰 治)
- ★現代用語の基礎知識 (自由国民社)
- ★てんやわんや (獅子文六)



人間失格と自らさげすみ、玉川上水に身を投げてグッド・バイとはキツイ冗談。

現代用語の基礎知識は普通の辞書では補いきれない現代的な社会用語とか流行語などを解説した年間誌。

この創刊号はB6版 (週刊誌の半分の大きさ) 192頁というところに時代を感じるが、着眼点は良かったようで、辞書モノには珍しく発売と同時にベスト・セラーになった。

今でも毎年刊行されているが、後輩の知恵蔵やイミダスに押され気味。

この年の流行語にもなったてんやわんや、混乱するさまをいうが、漫才の獅子てんや瀬戸わんやのネーミングはここから。

この年ウケたマンガ

- ★冒険ターザン (横井副次郎)
- ★黄金バット (永松 健夫)
- ★ロストワールド (手塚 治虫)
- ★地球SOS (小松崎 茂)
- ★アトミックのおぼん (杉浦 幸雄)



黄金バットといえば戦前の紙芝居のヒーローだったらしいが、ナマの記憶はない。

ロストワールドは、昭和21年に「マアちゃんの日記帳」でデビューした手塚治虫さんの問題作で、中学生の頃貸本屋で借りて読んだ記憶がある。

他にはジャングル魔境・月世界紳士・地底国の怪人などのSF・冒険モノがあり、名作ジャングル大帝・鉄腕アトム・ロック冒険記へと発展して行く。

その手塚マンガが物語の世界なら、小松崎茂さんの描く月着陸船や光速宇宙艇こそ現実ダと信じていたものだったが、どちらの夢も科学の進歩が見事にブッ壊してくれた。

